

日本語原文見本（部分）

1 【展示ホール・博物館地下遺構】

齋宮歴史博物館へようこそ。

この博物館は、齋宮について発掘調査や文献調査にもとづいて研究し、その成果を公開しています。齋宮とは、女性皇族である齋王が住んでいた宮殿のことであり、また齋王のための役所のことです。齋王とは、伊勢神宮に仕えた未婚の女性皇族のことです。

齋王の宮殿や役所は廃絶し、広大な遺跡が地下に眠っています。博物館は、この遺跡の隅に建っています。

展示物のボタンを押すと、博物館の建物の地下に、遺跡があることがわかります。博物館は、これらの遺跡を破壊しないように、地面に杭を打たずに建設されました。

2 【展示ホール・祈る齋王】

後姿の女性が齋王です。この展示は、齋王が神に祈りをささげている姿を表しています。齋王は、神に仕えるため、こころも体も清らかであることが求められました。

天皇が即位すると、新たな齋王が選ばれ、天皇が譲位、あるいは死去すると、齋王は退任します。

齋王に関わる制度は、7世紀後半に成立したと考えられます。確認されている最初の齋王は、大来皇女（おおくのこうじょ 661-701）です。彼女は、古代日本において中央集権的な国家をつくった天武天皇（てんむてんのう）の娘でした。齋王の制度は、14世紀前半に至るまで続き、約660年間に60人余りの齋王がいました。

3 【展示室 I 齋王の選定】

10世紀に成立した法律書である『延喜式（えんぎしき）』には、天皇の即位に合わせて、新しい齋王を選ぶことが規定されていました。その選び方は、未婚の内親王や女性皇族の中から占いで選ぶものでした。この占いは、亀の甲羅を焼いて、ひびの形で神の意志をたずねるものでした。

新しく選ばれた齋王は、宮中の初齋院（しょさいいん）と呼ばれる部屋にこもり、1年間、世俗から隔離されます。その後、都の郊外にある野宮（ののみや）と呼ばれる仮設の宮殿に移り、1年間、隔離されます。そして、選ばれてから2年から3年後に、齋宮がある伊勢に向けて出発しました。

4 【展示室 I 発遣の儀】

齋王が伊勢へ旅立つ日、齋王は平安京（へいあん-きょう）の西を流れる葛野（かどの）川で禊（身を清める儀式）を行った後、出発の儀式を行うため、宮殿内に入ります。

出発の儀式では、天皇はツゲ製の櫛を齋王の額の髪に差し、さらに齋王に「都の方を振り向くな」と告げます。この櫛を「別れの御櫛」と呼びました。

展示資料の櫛と箱は、12世紀初めの文献に基づき復元しています。

5 【展示室 I 群行（ぐんこう）—齋王の旅】

齋王は、数百人の人々とともに、約 130 キロメートルの道のりを 5 泊 6 日の日程で、伊勢に赴きました。この旅は、国家の重要な行事で、齋王群行（さいおう・ぐんこう）と呼ばれました。

目の前のジオラマでは、この旅の行路を、赤色で表示しています。

この旅で、齋王が乗った乗り物、葱華輦（そうかれん）の実物大の復元品が、展示室入口にあります。葱華輦（そうかれん）は本来、天皇と皇后の乗り物でしたが、齋王は天皇の代理としてこの乗り物に乗ることができました。

齋王が都に戻るができる機会は、天皇が譲位した時、あるいは天皇が亡くなった時でした。齋王が齋宮に滞在している期間は、それぞれ異なり、長い場合は、30 年間滞在したこともありました。

齋王が都に戻る行路は 2 通りあり、天皇が譲位した場合は赤色の行路、天皇が死去した場合は黄色の行路を通りました。

6【展示室 I 都を出る齋王】

この模型は、伊勢へと旅立つ齋王の行列が、都である平安宮（へいあんきゅう）の門を出る場面を再現したものです。

齋王は、12 人の人々に担がれた乗り物葱華輦（そうかれん）の中にいます。齋王に仕える多くの女性たちも行列に加わりました。この行列の責任者は、重要な行事であるため、閣僚クラスの貴族が選ばれました。

7【展示室 I 齋宮寮の組織】

齋宮には、国の出先機関の役所である齋宮寮（さいくうりょう）が置かれていました。展示パネルには、齋宮寮の組織が表示されています。貴族の地位をもつ長官を頂点に、12 の部署に分かれ、齋宮が運営されていました。また、祭祀に関わる組織もありました。

齋宮には大勢の教養のある女官が働いていました。古代において、都を除けば、女性たちが活躍をしていたところは齋宮以外にはなかったと言えます。

展示ケース内をご覧ください。齋宮跡で見つかった土器の中には、墨で役所の名前などが書かれたものがあります。このような土器は、役所として齋宮寮が活動していたことを示すものです。

8【展示室 I 齋宮寮の財政】

齋宮では、齋王のもとで 500 人余りの人々が働いていたので、これらの人々を支える財政の仕組みも整えられていました。齋宮の財政は国家の税制度によって成り立っていました。ケースの中には、税として齋宮に運び込まれた物品の復元品が展示されています。

10 世紀以降、税制度の崩壊が顕著となり、齋宮制度の衰退につながっていきました。

9【展示室 I ・齋王の居室】

このコーナーは、11 世紀ごろの齋宮での齋王の生活を、実物大模型で再現したものです。

奥に座っているのが齋王で、手前の女性が、命婦（みょうぶ）と呼ばれた齋宮の女官長です。

齋王は、神に仕えることが務めでしたが、日常は都で暮らす宮廷貴族と同様の生活を送っていました。

齋王、命婦ともに、宮廷貴族女性の正装である十二単（じゅうに-ひとえ）と呼ばれる衣服を着ています。十二単の特徴は、現在の着物とは異なり、帯がなく、長い裾をもつズボンの形に似た袴（はかま）をはき、服を何枚も重ね着している点です。十二単は、季節に応じて、重ね着する服の配色を変えました。ただしこの場面では、齋王は儀式用の白の十二単を着用しています。

部屋の左側にあるのは、御帳台（みちょうだい）と呼ばれる、組立式の寝台です。

10【展示室 I ・正月の儀式の食事】

正月元日に、天皇や齋王は歯固め（はがため）と呼ばれる儀式を行いました。これは、川や海の魚、肉、野菜、餅などを食べるしぐさをする儀式です。漢方の薬もあるように、年の始めに健康や長寿を願いました。

この展示品は、天皇の歯固め（はがため）の儀式に用いられた食事を復元したものです。齋王の食事と同じだったと考えられます。

11【展示室 I ・齋王の食事】

この模型では、齋王のもとで催された宴会で提供された食事を再現しています。12世紀初めごろに都で催された大臣主催の宴会のメニューを参考にして、齋宮に運ばれたと考えられる食材で再現しました。

古代の調理法は、刺身のように生のまま、あるいは焼くことが中心でした。酢、酒、塩、ひしお（味噌や醤油のようなもの）の4つの調味料を混ぜ合わせて自分好みのソースをつくり、食材に付けて食べたようです。これらの食事はおそらく儀礼的なもので、少し食べた後は、齋宮で働く人々に分け与えていたと考えられます。

齋王は銀製の器を用いたことから、ここでも再現しています。

12【展示室 I ・齋宮の井戸】

齋宮では、井戸の神をまつっていたことが文献からわかります。井戸、そして水は神聖で貴重なものでした。

齋宮は台地の上に位置したので、井戸はあまり多くなかったようです。しかし、齋王が住む御殿があった内院（ないいん）と呼ばれた区画では、8世紀の宮中（平城宮へいじょう-きゅう）のものにも劣らない大きな井戸が発見されています。

この井戸は、1.8メートル四方の大きさで、深さは6メートルにも及び、齋王に関わる特別な井戸であった可能性もあります。

（以上3,025文字）